

2 日本のエル・ドラド、上州永井宿（群馬県）

ぼくが天草で財宝探しを始めて四年目の、一九七七（昭和五十二）年九月のこと。勤務先に思いもかけない人から電話がかかってきた。

「畠山だけど。実は、ぼくが掘りたいと思つているところがあつてね。手伝ってもらえないだろうか。詳しいことはまだいえないが、例の徳川幕府の御用金なんだ。少なくとも、きみがやっている天草よりもずっと可能性は高いよ」

一瞬、全身に電流が走り、体の芯がブルツと震えたの

を、昨日のこのように思い出す。

「資金を出すという人物はいるが、ぼくが直接関わっていることがマスコミに知れると、騒がれて関係者に迷惑をかけてしまう。極秘にやりたいので、金で人を雇うのは具合が悪いんだ。三、四人は必要だから、きみのグループが実働部隊として参加してくればありがたいんだがね。もちろん、交通費や宿泊費などの実費は出すよ」

「ぜひお手伝いさせてください。いえ、先生、手弁当でもけっこうですから」

ぼくは、とっさにそう答えていた。「手弁当」なんて、たぶん初めて使う言葉だ。指定された打ち合わせの日時

と場所をメモして受話器を置いたが、しばらくは興奮がおさまらなかつた。

（大先生がおつしやるからにはまちがいない。しかも、日本でいちばん有名な徳川の御用金とは。いよいよホンモノの宝を手にする事ができそうだぞ）

畠山清行氏は一九〇六（明治三十九）年、北海道石狩町の生まれ。大正の末から埋蔵金伝説に興味をもち、全国の有効伝説地を訪ね歩いて、調査の成果をまとめた本を何冊も書いていた。ぼくが天草四郎軍の財宝のことを知ったのは、『足もとにあるかもしれない宝の話』（毎日新聞社刊）だが、一九七三（昭和四十八）年刊行の『日

本の埋蔵金（上・下）』と、後に出版される『新・日本の埋蔵金』（いずれも番町書房刊）が、畠山氏の研究の集大成だ。そのほか、ジャンルはちがうが、かつて市川雷蔵主演で映画化された『陸軍中野学校』（全六巻）の著者としても名高い。

そもそも、「埋蔵金」とか「埋宝」といった言葉をつくったのは、ほかでもない畠山氏で、名実ともにこの分野の最高権威。一攫千金を狙う人たちにとっては、教祖様のような存在だったのである。でも、情報を求めて訪ねていっても、たいていは門前払いを食うといううわさを耳にしていたから、直接話を聞きたいと願ってはいたもの

の、まだ二十代の若造だったぼくは、おそれ多くて近づきがたかった。

ただ、ぼくが仲間と天草を掘っていることを、氏はよく知っていた。その著書をもとにしているのだから当然の礼儀と心得て、調査のもようを手紙で報告していたからだ。また、最初の二年間の発掘の経緯を、『三角池探検記・天草四郎軍の遺宝を求めて』というタイトルで文章にまとめ、日本交通公社が発行する雑誌『旅』の「日本旅行記賞」に応募したところ、運よくそれが受賞作に選ばれたので、早速、掲載誌（一九七七年二月号）を送った。折り返しもらった手紙は、次のような内容だった。

「ご送付いただいた『旅』、たいへん興味をもって拝見しました。よく書けているので感心しましたが、同時に私としましては、どんな探索方法をとっていただけるのか、その点でも興味があつたわけです。たいへん楽しく、金に対する執念というよりも、レジャー的ムードでやっていられるご様子、ある意味では安心しました。といいますのは、私のところへ訪ねてくる人たちは、ほとんど資産を使い尽くし、借金もきかなくなつて、何とか一発当てなければという血眼の連中が多く、若いあなたが、そんなふうには迷い込むことでもあればと、心配していたわけです。埋蔵金というやつは、僕も本の中で書いている

ように、いったん始めると、もう一鍬もう一鍬で、やめることができなくなり、そのため、人からも世間からも相手にされなくなる。そうになると、またそうなったで、何とか小判一枚でも見つけて『そうら、このとおriあったではないか』と、あざけった連中を見返してやりたいというので、また掘り続け、ついには窮死するというようなことになります。中には幸運に恵まれて発見する者もあるのですが、出れば出るで、競馬で大穴を当てたと同様、『もう一つ』ということになり、せっかく取り返した発掘費用どころか、儲けた分まで全部つぎ込み、さらに借金を重ねて、食さえ満足に口にできなくなつて死

ぬというような者も多いのです。できるだけ埋蔵金探しなど、若い人にはしてもらいたくないのですが、あの旅行記のように、レジャー半分なら、ちよつと他には類のないスリルとロマンに富んだものになると思います（後略）

とにかく、ぼくにとっては劇的な展開に思えた。こちらからは連絡をとることもはばかられる相手から、直々に電話がかかかってきて、しかも有力な場所の発掘を手伝ってくれないかというのだ。

幕末に、江戸城内の御金蔵をはじめ、各地から集めら

れた総額およそ四百万両の金が、上州（群馬県）に運ばれて隠された。それが、世にいう「徳川幕府御用金埋蔵伝説」だ。目的は、幕府と徳川氏を守り抜くために、官軍（新政府軍）との決戦に備えて用意した軍用金であるという説と、少し時代をさかのぼって、大老の井伊直弼が、開国により日本の金銀が海外にどっと流出するのを避けるために一時疎開させたものが、軍用金として流用されたという説とがある。

情報はいくつかのルートから世間に流れ、その探索は埋蔵直後に始まっている。それからすでに百年以上たっているが（一九七七年時点）、まだ誰も発見してはいない。

探索者としてよく知られているのは、明治の半ばくらいから赤城山麓に住み着き、父子二代で発掘を行った水野家だ。初代ともよし智義氏のあとを継いだ二代目よしはる義治氏（智義氏の次男）は、太平洋戦争をはさんで深く長いトンネルを掘っている。一九七四年の暮れに、ぼくは友人に誘われて見学に行き、トンネルの中に入ったことがある。戦争直前の発掘には、当時の近衛内閣このえのブレインだった後藤隆之助しごとう りゆうのすけが仲立ちをして、軍が協力したという。そのほか、柔道の三船久蔵みつふね きゆうぞう十段ら、さまざまな人が水野家の発掘に関心をもち、援助を申し出たり見学にやって来たりしたらしい。

赤城山麓を掘ったのは水野父子だけではない。同家から北へ一キロほどの長井小川田の一角では、元警察署長の三枝茂三郎氏が、一九三八（昭和十三）年から三十年間発掘を続けた。また、御用金は古兵法「八門遁甲」によつて隠されていると考え、その謎解きに生涯をかけた高崎市の剣持汎輝氏や、彼の解釈をもとに掘った同じ高崎市の桜井柎寛氏、東京プレハブ社長の庄司一春氏らがいる。

さらに、最近はあまりないが、かつては夜中に車で乗り込んできて、一晩かけて穴を掘り、そのままにして帰っていく者もあとを絶たなかった。そういう連中のことを、

地元では「一発屋」とよんでいた。

数日後、ぼくは国電（現JR）信濃町駅前の薄暗い喫茶店で、畠山清行氏と向き合っていた。相手はすでに七十歳を過ぎていたが、厚い胸板、太くて短い首、黒ぶちの眼鏡の奥の鋭い眼光に、並々ならぬ精力が感じられた。若いころは政治家をめざして社会主義運動に没頭した経歴もあるそうで、貫禄も相当なものだ。埋蔵金との関わりも、官憲に追われて逃亡生活を続けているときに始まったという。天草の発掘について、ぼくが多少追加報告をするのを、畠山氏はスプーン四杯分の砂糖を入れたコーヒーをすすりながら黙って聞いていたが、それが

終わったところで、やおらこういった。

「ぼくの本を読んだ人間の中に、埋蔵金を掘り当てたのがいてね、盆暮れになると必ず付け届けをしてくるんだ。先生のおかげでという手紙を添えて」

いきなり度肝を抜かれる話だ。でも、そんなことがあっても、けっしておかしくない。いまでは、埋蔵金伝説に関連する古文書や絵図などを手に入れることは、すごく難しくなっているが、先生が研究を始めた昭和初期には、そういったものが出回っていて、実見することができた。そればかりか、幕末維新のころの出来事を知る人物がまだ存命していて、さまざまな証言を残している。畠山氏

の著書は、人と物証に丹念にあたり、真偽をよく分析したうえで書かれたものだ。埋蔵金探索者にとって、まさにバイブルともいうべきものなのである。

ぼくが嘆息をもらしていると、氏は追いつきかけようと言った。

「見つかった埋蔵金で、新聞なんかで報道されるのは、ごく一部さ。それらは、工事中など偶然の機会に掘り出されて、隠せなかったものだ。実際にはもっとたくさん見つかっている。偶然の発見もあるし、探索者が掘り当てたものもある。昭和三十年代から四十年代にかけてのおよそ十年間に、ぼくのところに報告が寄せられたもの

だけでも百件を越えているよ」

「百件ですか！」

想像を絶する数字だ。日本が高度成長期にあったそのころは、確かに埋蔵金の発見例が多かった。各地でビルや道路の建設がさかんに行われていたからだ。一九五六（昭和三十一年）年に、東京・銀座の小松ストアーの改築工事現場から二百枚以上の小判が発見されたときは、場所が場所だっただけに大きな話題になった。七年後の一九六三（昭和三十八）年には、隅田川に近い中央区新川の日清製油（現日清オイリオグループ）本社ビルの地下から、千九百枚の小判と約七万八千枚の二朱金

が出てきて、人々を驚かせている。その二つを含めて、三十年代に東京だけで金銀貨の出土例が十件報告されている。だが、実状はそんなものではなかったのだ。しかも、ぼくたちのような探索者の手で掘り出されたものもあるとは。

なぜ公表されないか、その理由は明白だ。正規の手続きを踏めば、発見者の取り分が少ないからである。他人の土地で発見した場合、よくて半分、へたをすれば一割しかもらえない。外国では、あらかじめ国や州政府などと取り決めをして、かなりの部分が発見者のものになるケースが多いと聞いていた。

そういうった雑談を交わしたあと、いよいよ本題に入つた。

「さて、徳川幕府の御用金だけど、ぼくはあると思つて
いるんだ。以前、雑誌の企画で、その信ぴょう性をめぐつ
て、当時の歴史学会会長の高柳光寿博士と激論を交わし
たことがあつてね。もちろん、相手はそんなものあるは
ずがないという。論争に負けたつもりはないが、出して
みせないことには、自説の証明はできないわけだからね」
ぼくはうなずいた。著書の中でも、幕府御用金に關す
る章にはかなりページが割かれていて、思い入れの強さ
が感じられる。比較的歴史の浅い伝説だし、客観的にみ

ても信ぴょう性が高い部類に入る。先生は、長年にわたる調査で、確信のもてる場所を絞り込んでいるにちがいない。いったいどこなのだろうか。

ふと、天草の件で知り合ったカトリック教会のフラガ神父のことを思い出した。神父が超能力者の助けを借りて探り当てた赤城山の南面にも行ったことがある。それらしい場所が確かにあったが、神父はまだ手をつけていないはずだ。

「掘るのはやはり赤城山ですか」

ぼくは単刀直入にたずねた。ところが、まったく意外な答えが返ってきた。

「いや、同じ群馬だけど、猿ヶ京さるがきょうと三國峠みくにとうげの中間にある永井ながいというところさ」

初めて聞く地名だ。温泉で有名な猿ヶ京はよく知っていた。国道十七号沿いにあり、学生時代、映画制作のサークルで、苗場スキー場にロケに行ったときに通過しているし、就職後、社員旅行で猿ヶ京から三國峠まで行き、さらに弘法大師が見つけたといわれる法師温泉ほうしへ下ったこともある。その近くらしい。

「幕末に猿ヶ京の手前にある寺に、大量の荷物が馬で運び込まれている。目撃者が昭和初期まで生きていたからまちがいない。ところが、それが行方不明になっている

ので、いろいろ調べてみたら、どうやら永井に移されたらしい。しかも永井には、いまは出入り口がふさがれた謎の横穴があることがわかっている。この横穴が怪しいとにらんだわけだ」

ぼくの目を凝視して話す畠山氏の背後に、オーラが立ちのぼっているように思えた。驚くことに、永井にはそのほかにも四つの隠された財宝の話が伝わっているというではないか。

「エル・ドラドって、知ってるかい？ 永井がそれさ。つまり黄金郷なんだよ」

畠山氏の眼が一段と輝きを増した。ぼくは興奮を抑え

きれずにいた。

「いつやりますか。四人は確実に集められますから」

このときはもう十中八九、黄金を手にした気になっていた。

「遅くとも来月の末までには片づけたいんだ。十一月に入ると雪が降り出すからね」

見つければ時価何十億、いや、何百億かになるだろう。その金額は、ぼくたちにとっては非現実的だが、埋蔵金探しそのものはすごく現実味を帯びていた。なんといつでも、今度は日本の埋蔵金研究の権威である畠山清行先

生が、確信をもつ場所を掘るのだから。

小判の山に埋もれる夢を見ながら、ぼくたちの群馬通
いが始まった。その年の十月初旬のことだ。目的地は利
根郡新治村（現みなかみ町）永井。信越線の後閑駅ごかんから
旧三国街道、現在の国道十七号をバスで猿ヶ京まで行
き、そこからタクシーで十五分ほどで着く。戸数二十六
のひっそりとした集落は、猿ヶ京温泉と三国峠のほぼま
ん中の国道沿いにある。関越自動車道が全面開通したの
は、それよりずっとあとの一九八五（昭和六十）年だか
ら、そのころは十七号が関東と新潟を結ぶメインルート
だった。

ふだんも大型トラックがひっきりなしに行き来していたが、行楽シーズンともなると、三国温泉郷をめざしてやって来る車でいっぱいになり、とくに冬場は、苗場、湯沢、石打といった有名なスキー場へ向かう首都圏からの車が、長い列をつくる。

旧三国街道は、古来「塩の道」として知られていた。それが中世の終わりに、上杉氏の関東侵略のための軍道となつてからは、人や物の往来がさらに盛んになった。近世になつて、佐渡と江戸を結ぶ重要な経済ルート、つまり「金の道」は、メインルートの「信州通り」のほか「会津通り」と「三国通り」があり、この三つを「佐

州三道」といった。中でも三国通りは、険しい山越えにはなるものの、距離は最も短かったので、脇往還わきおうかん（バイパス）として重要な役割を果たした。

一六八九（元禄二）年、永井は米問屋場に指定され、越後米の関東への流入口として位置づけられるいっぽう、泊本陣しほもとじんが置かれると、長岡ながおか、新発田しばたなど越後七藩と佐渡奉行がこれを利用し、宿場として栄えた。一八六〇（万延元）年に大火事があつて、本陣をはじめほとんど家が焼失したが、本陣は翌年に再建された。間口十五間の壮大な平入切妻造の二階家で、珍しい柿板ぶきだった。しかしこれも、昭和八年に本陣の笛木家ふえぎの移転にと

もなつて売却され、いまはわずかに一枚の写真と一枚の平面図、それに波と兎の彫刻のある、表側の縁を支えた「持送」もちおくりが残されているだけである。

旧街道沿いの家並は白壁で統一されており、予備知識をもつて眺めれば、参勤交代の宿場として栄えていたころの面影を見いだすことができるだろうが、現在の国道は集落の屋根をかすめるように走っているから、地元の見光協会が立てた畳一畳分ぐらいの解説看板や、本陣の跡にある写真と図面の掲示板、与謝野晶子の歌碑などは人目につきにくく、一般の通行者は、そんな永井の歴史に関心をもつ機会がない。もちろん、莫大な財宝が隠さ

れているなんて、夢にも思わないはずだ。

畠山氏は、赤城山麓に残る埋蔵金関係文書を調べているときに、ある謎文を「さるがけふ 十二 黄金一万枚」と解読した。「さるがけふ」は猿ヶ京にまちがいない。問題は「十二」が何を表す数字かということだ。いろいろ当てはめて考えてみた末に、これが山の神をまつる「十二神社」ではないかという結論に達した。御用金を埋めた目印として、神社を利用した可能性がある。調べてみると、猿ヶ京付近には十数カ所の十二神社があった。

また、その調査の途中で、重大な事実を探りあてた。

幕末に、猿ヶ京の少し手前にある相俣あいまたの海円寺に、大量の荷物が運び込まれ、それが数日後に寺の境内から姿を消し、行方がわからなくなっているのである。武器・弾薬だったという説もあるが、幕府方が、官軍との決戦を三国峠で迎えることを想定して運んだ軍用金とも考えられる。江戸の金座・銀座から持ち出された十数万両の御用金が、これではないだろうか。謎文の「黄金二万枚」にも、ほぼ数字が一致する。ふつう、「黄金一枚」といえば大判一枚のことだ。これが十両に相当するからだ。実際に、三国峠では一八六八（慶応四）年春、会津軍と官軍との戦いが起こっている。

そこで、猿ヶ京から三国峠にかけての街道筋をくまなく調査した結果、本陣をはじめほとんどの家が海円寺の檀家である永井が浮上した。ここにも十二神社はある。しかも、永井の十二神社の地下には、謎の横穴があることがわかった。一九四一（昭和十六）年、軍用道路として計画されたいまの国道十七号の工事中、永井の蛇原山じやばら腹にぽっかりと穴があいた。道路予定地の地下三メートルのところ、人の手によって掘られたとしか思えないトンネルがあったのだ。これが一回目の発見だった。工事関係者が中に入ってみると、途中で分岐した総延長八、九十メートルの細長い地下道で、出入り口みたいなもの

は一カ所もない。だが、この年の暮れに太平洋戦争が勃発したので、軍用道路は猿ヶ京まで完成したところで工事がストップし、穴は危険なため、埋められてしまった。

それから二十一年後、三国峠にトンネルを掘り、関東と新潟を結ぶ大動脈としての国道工事が大詰めを迎えた一九六二（昭和三十七）年秋のこと。前回穴があいた場所から五十メートルほど猿ヶ京方面に下った、標高八百メートルちょうどの地点で、またもや穴があいたのだ。このときは、群馬大学の教授がやって来て調査したり、新聞や週刊誌に記事が掲載されたりしたが、本陣の蔵の裏から山に向かって掘り進めたらしいというだけで、結

局何を目的として掘った穴なのかよくわからないまま、工事の進行を優先させて、ひと月たらずのうちに埋められてしまった。

このことを知ったとき、畠山氏は身震いした。

（御用金の隠し場所は、この穴をおいてほかにない！）

ところが、もつと驚くべき秘密がこの村には隠されていた。不思議なことに、永井には幕府御用金に関するいい伝えは何もない。しかし、ほかに四つもの黄金伝説があったのだ。

一つは、これも幕末のことだが、佐渡から江戸に御用金を運ぶ一行が永井に投宿した。しかし、江戸にはすで

に薩長の討幕軍が入ってきているといううわさ。一行は危険を感じ、金を江戸へ運ぶか佐渡へ持ち帰るか迷っていたが、ある夜、黄金は忽然と消えてしまった。前に述べたように、佐渡の御用金運搬のルートとしては信州通りがメインで、三国通りを利用することはほとんどなかったらしい。現存する正式な記録では、わずかに、一七五一（宝暦元）年の高田地震の際に、信州通りが使えなくなり、この永井を通ったとあるだけだ。とはいえ、幕末のどさくさで記録に残らないものがあっても不思議はないし、この事件は『永井本陣日記』にも記されている。

二つめは、年代ははっきりしないが、あるとき、牛八

頭に積んだこも包みの黄金の延べ棒が、どこからか運び込まれたことがある。それは本陣の中庭に導かれ、やがて出てきた牛の姿は目撃されているが、積荷のほうは、それっきり持ち出されるところを見た人はいない。

さらに、一八六八（慶応四）年二月、この地方を「世直し大明神」というのぼりを立てた賊徒が襲った。富を蓄えている永井本陣も、彼らのターゲットに上がっていたが、事前に計画を察知した本陣の主人、八代目笛木四郎右衛門は、金銀財宝を三個の千両箱に詰めてどこかへ隠した。結局賊徒は、内部に本陣襲撃をおしとどめる者がいて、永井には攻め入らず解散してしまっただが、その

ときに隠された財宝は、なぜかそのままになったという。そして四つめは、明治維新後、それも一八七七（明治十）年の西南戦争のころの話である。

東京の警固のために、新潟の新発田に駐屯する「歩兵第三連隊第二大隊」が上京する途中、永井に一泊した。そのとき一行は、新貨条例に基づいて明治四年から発行された一円金貨や五円金貨を、軍費として大量に所持していた。貨幣制度の移行当時には、一両が一円と同等とされ、新旧貨幣の交換が行われていたが、一円金貨は純金がわずか一・五グラムしか含まれていない、小指の爪ほどの大きさの貨幣である。これが小判一枚と同じ値う

ちだといわれても、初めて目にする永井の人々は信用しない。村人が、それはにせ金だといってとりあわないので、困った連隊の幹部は、本陣に頼んで旧貨幣と取り替えてもらった。

結果として、八代目笛木四郎右衛門の手元には、革袋いっぱいの新金貨が集まった。そこでふと、四郎右衛門は一抹の不安を感じた。両替してやったことによつて、はからずも本陣の富裕さを公開してしまつたのだ。いくら兵隊だとはいつても、中にはどんな不心得者がいるかわからない。みょうな気を起こされてはたいへんだ。そこで、集まつた新金貨だけでも、人目につかない場所に

隠しておこうと思ひ立つたのである。

それは一時、本陣の家族が使う便所の便壺の中に隠されていたと、後に家族が証言している。また、何事もなく新発田の連隊が立ち去ったあと、四郎右衛門が革袋を引き揚げ、沢に洗いに行くのを目撃している者もいる。ところが、沢から帰ってきた四郎右衛門は、革袋を手にしていなかった。どこか別の場所に隠し直したらしいのだが、その場所を彼は誰にも語らなかつた。

年月が過ぎ、年老いた四郎右衛門は中風を患って寝ついてしまう。あるとき、自らの死期を悟つたのか、かなわぬ口や手を必死に動かそうとするその姿を見て、きつ

と隠した金のありかを告げようとしているのだらうと思つた家族が、石盤と石筆を手渡すと、震える手で何やら必死に書き残した。ミミズのはつたような、およそ文字とはいえないものだったが、その中で「金」と「穴」の二文字が、かろうじて読めたというのである。

以上の四つの伝説の詳しい内容は、国道に面する民宿「越路^{こしじ}」の一室で、畠山氏から直接聞いた。そこにはぼくの仲間、天草でいっしょに掘つた全日空の古園井俊夫君、フリー編集者の阿波田時彦さん、イラストレーター白井正樹さん、会社の同僚の鈴木俊男君もいた。

「まさしく、エル・ドラドですね」

ぼくは、ため息をもらした。

「そうなんだよ。トンネルを探し当てて、その中を徹底的に調べれば、悪くても一つ、ひよつとしたら複数の財宝が見つかるかもしれない」

畠山氏は自信満々である。眼鏡の奥の鋭い眼を、いつそう輝かせた。もし四プラス一の財宝すべてがまだ掘り出されていないとすると、総額はいったいどれくらいになるのだろうか。

「過去にどれかが発見されたという話はないんですね」
ぼくは念押しした。

「まったくくない。二度穴があいたときも、何か見つかれ

ば秘密にはできなかつたはずだからね」

もう一つ、衝撃的な出来事があった。今回の発掘資金の出資者である仲元なかもと虎齋とらとし氏（当時六十八歳）との出会いだ。ぼくらはいささか緊張していた。畠山氏に、

「仲元君は、戦前は朝鮮総督府の役人で、剣道の達人らしい。いかめしい顔つきをしていて、耳が遠いせいとか、声が大きく、ちよつと取っつきが悪いんだ。自由人のぼくなんかとは肌が合うタイプではないが、君たちもひとつうまくつきあつてほしい」

といわれていたからだ。第一印象は、確かに畠山氏から聞いたとおりだった。もらった名刺には「三起工業代

表者」とあり、住所は山口県光市ひかりとなっている。造船や鉄骨関係の会社の社長さんだ。もつとも、そのころ社業のほうは娘さんに任せて、自分は埋蔵金探しに専念していた。

（そんなことが、ほんとうにできるのだろうか）

初めはぼくもそう思ったが、経歴を聞いて驚いた。この世界ですでに実績をあげた、つまり、財宝を発見した経験のある人物だったのだ。

太平洋戦争が終わってしばらくたったころ、仲元氏は、後に総理大臣になる同郷の岸信介氏きしのぶすけから、旧日本軍が台湾各地に隠した軍需物資類の探索を依頼された。そして、

十年間にわたって台湾各地を転々とし、機密文書にあつたとおり、さまざまなものを探り当てた。兵器、新品の軍服、毛布、工作機械。北部の基隆市キールンでは、旧日本軍の施設だった建物の地下から、一二六キロもの金塊を見つけている。

ついでに金鉱の調査もやったそうで、中部の花蓮山ホワリエン中での見事な露頭の発見エピソードには、ヨダレが出るほど興味をそそられた。

「山間の小さな村に、知り合いの日本人の医者イシヤが診療所を開いていたので訪ねて行ったんだが、村人が大雨が降ったあと、川で砂金を採るといふじゃないか。やつら

は、金を川で採ることしか知らないんだな。こりゃあ、上流に相当いい鉱脈があるはずだと確信して、探し回ったわけだ。すると、見つかったよ、すごいものが。ある場所で、岩壁にはりついたツタみたいな植物をガバツとひっぺがしたら、金を塗った手のひらでベタベタあとをつけたような露頭が現れたんだ。たまげたねえ。ひとりで行ったから、その場所は誰にも教えていない。まだそのままあるはずだ。そのうちいつしよに行ってみるかね」

「ぜひぜひ連れて行ってください。見てみたいです」

ぼくはそのとき本気でそう答えたが、台湾の金鉱探検ツアーは、ついに実現しなかった。

仲元氏は、現地では最高級のホテルに宿泊して、運転手つきの車をあてがわれるなど、VIP待遇を受けたそうだ。ただし、初めから、発見したものは台湾政府に渡すという約束があり、帰国の際には、記念品として金杯を三個作ってもらったただけだった。だから、国内でもつと実利のある探索をしたいという気持ちが強かったのだろう。金塊を発見したときの興奮が醒めやらず、それが尾を引いているようにも思えた。

仲元氏は帰国後、畠山氏の著書を熟読した。そして、絞り込んだターゲットの一つが、戦国大名結城晴朝ゆうきはるともの埋蔵金伝説だった。埋蔵地の候補として何カ所かあげられ

ているが、中でも、栃木県河内郡南河内町（現下野市）
本吉田もとよしだにある会之田城あいのだ（別名的場城まとは）の跡は、晴朝の隠
居所だったといわれるところで、これまでもっとも注目
され、何人かが発掘を行っている。

仲元氏はここに、台湾から持ち帰ったアメリカ製の電
気探知機をかけてみた。それが反応を示したので、ブル
ドーザーを使って大がかりな発掘を開始した。昭和四十
年代の初めのことだ。

そのころは、造船業界は景気がよく、会社はだいぶも
うかっていたらしい。鋼鉄船を造ると、大量のスクラッ
プが出る。それを回収業者に売却すれば、月に四百万円

くらいになり、全部を発掘費用に回していたというからすごい。

そして一九七〇（昭和四十五）年、彼は地下に古井戸のようなものを発見した。そこでいったん切り上げ、準備期間を経て六年ぶりに発掘を再開しようとしたところ、問題が起こった。城跡には二軒の家があり、結城氏の家臣の子孫であるI家のほうは発掘に協力的だが、もういっぽうのY家は伝説そのものを信じていない。掘ろうと思った場所が、ちょうど両家の境界付近だったので、Y家のほうからやめてくれという申し入れがあったのだ。

困った仲元氏は、畠山氏に話をつけてくれるよう頼みこんだ。それが前年の初めのこと。畠山氏は、かつて結城市に住み、市議をつとめたこともあって、このあたりでは顔がきく。I・Y両家とも、取材をしたことが縁で懇意にしている。だから、交渉代理人としてこれ以上の人物はいないと、仲元氏は見込んだわけだ。

畠山氏も、それまでの調査の経緯を聞かされ、発掘を続ける価値があると判断して、積極的に交渉に乗り出した。そして、東京の女子大に通っているY家の娘さんの卒業論文を畠山氏が代筆するという条件で、めでたく地主の説得に成功し、調査を再開することができたのである。

る。

では、その成果はどうだったのか。

結論を先に言うのと、うまくいっていない。実は、途中まではうまくいっていたのだから、とん挫してしまったのだ。

本吉田の発掘には、畠山氏の要請で、赤城山の水野智之氏と、彼が経営する広告看板制作会社の社員数名が参加していたが、作業の手順をめぐる仲元氏と水野氏が摩擦を起こし、さらにY家から、これ以上穴を深く掘ると母屋が傾くおそれがあるからと、中断を強く求められた。

畠山氏ももはやこれまでと、中断の決定を下した。そして、諦めきれない仲元氏をなだめる意味で、とっておきの場所、永井の発掘を提案した。ただ、畠山氏はもう仲元氏と水野氏を組ませることはできないと判断した。かといって、日当を払って人を雇うことにも問題がある。そこで、喜んで来てくれて、しかも秘密を守ってくれそうなぼくに声をかけたわけである。

仲元氏の電気探知機は、ここ永井でも上々の反応を示しているらしい。あとは掘るだけだ。

「ここまでこぎ着けるには、いろいろと苦労が多かったよ」

畠山氏が、感慨深げにいった。最初に障害となったのは、穴を掘ることにした土地の一部が、永井の住民以外の所有になっていったことだ。実は、トンネル探しのための発掘は、これが最初ではない。一九六九（昭和四十四）年に、猿ヶ京の近くにあるレジャーランドが、ブルドーザーで掘ったことがある。経営不振の打開策として、この謎のトンネルを新しい観光名所にしようと考えたのだ。

結局、トンネルは見つからず、たった一度だけの発掘であきらめたようだが、やっかいなことに、そのとき民宿兼食堂「越路」の主人で、元教師の笛木大助氏が売却

した土地は、そのままレジヤールランドの所有になつていた。もし、今回めでたく財宝が発見されると、レジヤールランドも所有権を主張することができる。そうならないように、この土地を笛木氏に買い戻してもらふことにした。その費用は仲元氏が負担した。

次に畠山氏は、気持ちよく作業を行うため、地主だけでなく、永井の住民すべての同意と支援を得ようと考えた。レジヤールランドが、掘ったあとを埋め戻しもせず、ほつたらかしにして住民のひんしゆくをかつた過去があるからだ。

笛木氏の肝煎りかんせんりで、永井二十六戸の人々との会合が開

かれ、発掘予定地に近い十二神社に、何がしかの奉納金を納めることのほか、発掘の期間は一カ月とすること、発見したときの配分は、畠山グループと村で半々にすることなど、六項目の条件をしたためた契約書を作成し、九月中旬に合意に至った。

さわやかな秋晴れの、絶好の穴掘り日和だった。「晴れ男」という言葉は、ぼくのためにあるらしい。遠出をするとき、雨にたたられることはほとんどない。とくに、天草で宝探しを始めてからは、前日までの雨がピタリとやんだり、現地へ向かう途中で大雨が降っても、いざ発

掘となるとカラッと晴れ上がるといった、不思議なことが続いていた。台風の直撃を受けたときでさえ、雨はほとんど降らなかつた。どうやら天は、ぼくの宝探しをサポートしてくれているようだ。

前に穴があいたところは二カ所とも国道上だから、そこを掘るわけにはいかない。そこで、道路より三メートルほど高くなった畑の一角から、横穴めざして縦穴を掘りおろすことにした。笛木大助氏の助言によって割り出したポイントで、前日のうちに石灰でマークしてあった。笛木氏は、最初の発見時に穴の中に入ったことがある。そのかすかな記憶だけが頼りだ。

(六メートルから八メートルも掘れば、横穴に届くだろう)

道路面との高度差を考えて、そう計算していた。

「さあ、三日で掘り当てろぞ！」

ぼくは意気込んでシヨベルを振り上げた。

「待て待て、その前にやることがある」

畠山氏が制して、用意した塩と御神酒をおごそかに地面にまいた。これは、先生が早起きして、直前まで神社に供えておいたものだ。ぼくたちもそれにならない、手に手に塩をとって、そこらじゅうにまき散らす。そして、御神酒の入った一合びんを回して、ひと口ずつ飲んだ。

簡単な地鎮祭が、こうして終わった。

穴の大きさは直径一・五メートルと定めた。天草は湿地帯だからやりにくかったが、ここならちゃんとした穴掘りができそうだ。ただ、一メートルも掘ると石混じりの赤土の層が出てきて、シヨベルでは歯が立たなくなり、つるはしでいったん土を掘り起こしたあと、シヨベルですくい上げるといふ、二度手間のすごく体力の消耗する作業となった。ピッチが急激に落ちる。

そして、肩まですっぽり隠れるくらいになったところで、根本的な工法の転換を図らねばならなくなった。つまり、土をシヨベルで放り出すことができなくなるので、

地上から引き揚げる装置が必要になつてくるのだ。

そのへんはプロの仲元氏がよく心得ていて、あらかじめ用意してあつた三本の角材を組み合わせてやぐらを組むと、二方向に横木を渡して補強する。木と木は太めの針金で結わえて締めつけるのだが、仲元氏の道具の扱いは実に鮮やかで、後々のためになるかと思つて、ぼくはその要領をじっくり教えてもらった。

やぐらのてっぺんに滑車をつるし、ロープを通して、その先に塩化ビニール製のザルを取りつける。穴の中に入つて掘る係、ロープを引き揚げる係、上がったきたザルから土を一輪車にひっくり返す係、一輪車で土を捨て



に行く係に分け、ローテーションで十五分ごとに交代した。

みんな、体力も意気込みも十分だったので、作業はほとんどはかどり、穴から五メートルほど離れた、かつてレジャーランドが掘ったあとの窪地が、廃棄する土でまたたく間に埋まっていく。一日で穴の深さは二メートル近くまでいった。

風呂を浴びて食事をすませたころに、さすがにどっと疲れが出てきた。とくに、右の手のひらに、つるはしの柄から受けるショックが、痛みのかたまりとして残っていた。でも、気分は爽快だった。

二日目、三日目と、ほぼ同じようなペースで作業が進んでいった。夜は、法師温泉の「長壽館」に風呂だけ使わせてもらいに行ったりもした。およそ日常生活とはかけ離れた日々――。

畠山氏の心配をよそに、ぼくらは仲元氏とみようにウマが合った。べつに努めてそうしたわけではない。自分で言うのもなんだが、ぼくたちはよく働き、仲元氏に気に入られた。手弁当でもいいといったのに、宿泊費や交通費を出してくれるのだから、それに報いらなければならぬ。

仲元氏は猥談の名人でもあった。たとえば、朝鮮半島

で精力剤として珍重される肉の青いアワビの話。身ぶり手ぶりで、その効果てきめんの様子を語ってくれる。ぼくたちは笑い転げた。聞けば、仲元氏は光市の更生委員で、受刑後に足を洗った元暴力団員なんかを、社員として積極的に雇用しているのだという。そういった気の荒い造船所の社員たちを統率し、士気を高めるのに、猥談は効果があるのだろうか。

四日目に、縦穴は七メートルに達した。

(もうそろそろじゃないかな)

しかし、穴の底や周囲をつついてみても、そこに空洞が現れる気配はまったくくない。自由業の白井さんと阿波

田さんを除く三人は、続けて休めるのは四日間が限度だったので、全員がいったん帰京してそれぞれの仕事に戻り、中二日おいて作業を再開した。

八メートル、九メートルと深くなるにつれ、この場所に疑問がわいてきた。考えてみれば、正確な測量をやったわけではないので、幅二尺（約六十センチ）という横穴にぶつかる確率は低い。

十メートルから先は、センチ単位で感触を確かめるようになつた。

「あと十センチくらいだろう」

それでもダメだったら、

「もう十センチか？」

赤城の周辺を掘ってきた先輩たちも、きつと毎日こんな調子だったにちがいない。一日か二日ならまだしも、十年も二十年もこれが続いたら、いったいどんな心理状態になるのだろうか。

深さ十メートルの穴の底というのは、ぼくにとつてまったく未知の世界だった。第一、昇り降りだけでもたいへんである。二本の太い針金に角材をくくりつけた、仲元氏手製のはしごを、もう何回継ぎ足しただろう。はしごだけにすがりつくのは不安なので、ザルのついたロープを補助的に利用して、二、三人がかりで降ろした

り引き揚げたりする。昇降に時間がかかるし、ザルを一回引き揚げるのにも、初めのころと比べるとかなり手間取るようになったので、ローテーションは三十分ごとにした。

穴の底から見上げると、入り口は頭上はるか。満月よりも小さく感じる。豆粒ほどの小石でも、落下の直撃を食らうともものすごく痛いので、ヘルメットをかぶるのはもちろんだが、民宿で借りた小さめの座布団を三角形に折って肩をおおい、プロテクター代わりにした。まるで、アメリカンフットボールの選手のような格好だ。

ヤマ（土砂崩れ）の危険もあった。十分に注意しながら、

ひたすら掘り続け、二週間後、縦穴は十二メートルに達した。もうこれ以上掘ってもムダかもしれない。

仲元氏が、長さ一メートル強、太さが三センチもある先のがった金棒を、底に向かってまっすぐに落としました。ドスツと、湿った土に突きささる音。はしごを降りていった仲元氏は、半

縦穴は深さ 12 m に達したが、横穴につながる気配はなかった。



分近くまで土にもぐった金棒を力まかせに引き抜き、頭の上まで振り上げて、何度か突き立てた。

もし、底が抜けて空洞とつながったら、仲元氏は一瞬のうちに闇に吸い込まれてしまうはずだ。それよりも、穴のふちがボロボロ崩れている。どつとヤマがきたら、どうすればいいのだろう。

しかし、この老トレジャーハンターは、いつこうにかまわず、納得のいくまで調べると、やがて無言のままゆっくりとはしごを昇って地上に姿を現した。ふうつと大きく息をつき、周りを見回した。

「ここまでやな。どうもちごうとるごたる」

畠山氏も、その言葉を予測したように、

「残念だけど仕方がない。そろそろ雪も降り始めるころだし」

と、総指揮官としての断を下した。

(悔しい。これだけの穴を掘ったのに)

せっかくの穴をすぐに埋め戻すことに未練があったので、分解したやぐらの角材などで嚴重にふたをして、次回の発掘まで保存することにした。

陽が落ちると、急に底冷えがしてきた。村はこれから長い冬に向かう。

「前に穴があいたところに、できるだけ近いところを掘りましょうよ」

翌年の三月初め、ぼくは畠山氏に提案した。いつもより長く感じられる冬を過ごしたあとだった。

「まあまあ、ぼくにまかせなさい。国道のすぐ脇を掘るとなると、建設省の許可が必要だから」

先生は落ち着いていた。実はもう、知り合いの大学の先生ら数名の名前を借りて、「永井宿史蹟学術調査団」を結成するなど、着々と準備工作を進めていたのだ。

そして、所轄の建設省高崎工事事務所沼田維持修繕出張所に、道路敷の発掘許可願いを出したのが五月、もろ

もろの七面倒くさい手続きを経て、正式な許可が下りたのは、梅雨のさなかの七月七日のことだった。許された期間は、七月二十八日から八月二十七日までの一カ月間。大きな前進だった。

七月二十七日の夜、ぼくらは畠山氏とともに上野を発つことにした。ところが、山口から上京して合流するはずの仲元氏の姿が見えない。その理由を畠山氏が説明してくれた。

「実は、さつき仲元君とここで会ったんだけど、彼が家に電話を入れたら、娘さんが急病で入院したというんだ。新幹線でUターンしていったよ。今月中にはなんとか来

れるようにするから、仕事は先にやってくれということだ」

ちよつと手鼻をくじかれる思いがしたが、畠山氏は続けてこんなことを言う。

「君たちは信じないかもしれないけど、これまでも、埋蔵金の探索をやろうとするときに、みようにその妨げとなるようなことが起きるんだ。霊能者とよばれる人間や易者なんかは、埋蔵金には隠した者の執念や、埋蔵工事の犠牲者の怨念がこもっているから、そういったことが起きるのだというが、はたしてそれがほんとうかどうかはわからない。でも、不思議にこれが有望だと思える

ときほど、障害の起きるのが激しいんだよ。だから、今度はいよいよという気がするんだが」

喜んでいいものかどうか、複雑な思いだった。

九カ月ぶりの永井は、相変わらずひっそりとしていた。民宿「越路」に落ち着き、畠山氏から許可証を見せてもらったとき、ぼくは（あれっ）と思った。発掘予定地が、考えていたところとちがっていたのだ。そこは、水彩画を趣味とする越路の主人、笛木大助氏のアトリエの前で、昭和十六年にあいた穴の近くらしい。ちよつとした空き地になっているから、交通の妨げにはならないし、許可が下りるのは当然だろう。

でも、ぼくとしては、昭和三十七年にあいた穴の近くを掘りたかった。こちらのほうが、情報が新しい分、成功率が高いと思われるからだ。今度は無駄骨を折りたくない。確実にトンネルに到達したい。

「三十七年の穴に近い道路脇の斜面を切り取って、そこを掘りたいのですが」

ぼくは畠山氏に進言した。

「うーん。それができればいいが、許してもらえるかな」
先生は腕組みをして首をひねる。許可をもらうことを最優先した結果がこうなったのだ。それもわからないではない。へたな場所を申請して不許可になったら、発掘

そのものを断念しなければならなくなる。幸い、次の日の午前中に、建設省の役人が来ることになっていたので、それを待つことにした。

「ダメもとで、言うだけ言ってみましょうよ」

ぼくの提案に、畠山氏もうなずいた。

翌朝、黄色い道路パトロールカーが到着し、助手席から作業服を着てヘルメットをかぶった中年男性が降りてきた。ぼくたちを認めても、表情を変えることなく歩み寄ってきた。

「いよいよ始まりますか」

精一杯の愛想に思える。畠山氏はすでに顔見知りのK

係長だった。そこでぼくは、平身低頭して発掘場所を変更したいと懇願した。係長の表情がにわかにならばる。

「そりゃあ、話がちがうじゃないですか」

予想どおりの反応だ。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。ぼくはあえてしゃしゃり出た。

「私たちは村のためにも、この調査をぜひ成功させたいと願っています。また、場所が場所だけに、できるだけ短期間に無事にやり終えたいと思っています。そのためにはですね、いまマンホールのある、三十七年に穴のあいた場所にもっとも近いところを掘るしかないんです。なんとか許可していただけませんか」

わずかだが、係長の心が動いたことを察知すると、ぼくはその場に連れていった。仲元氏がいないので、工事の方法についてもぼくが説明するしかない。

「斜面を切り開き、十分なスペースをとって縦穴を掘ります。側溝の内側にベニヤを立てて、土が道路にはみ出さないようにします」

係長の首が小さく上下に動いた。

(よしよし、いい感触だ)

「土は、もともと発掘許可が下りていた空き地に積みま
す。深さ四、五メートルの穴の分は、十分収まると思
いますよ」

「……」

係長は腕組みをして考え込んだ。ぼくの説明の妥当性を、もう一度頭の中で確認しているように見えた。

「まあ、いいでしょう。せつかくここまで準備しておられることだし。だけど、くれぐれも交通に支障のないようにしてくださいよ」

ぼくたちは顔を見合わせてニンマリした。コゾノイは、係長には見えないように、腰のところに置いた手でVサインをつくっている。

係長がパトロールカーに乗り込み、その姿が見えなくなるのと、大声で「やったやった」と叫びながら、ぼくた

ちは地鎮祭用の酒と塩を取りに宿へ戻った。

「さあ、三日でケリをつけるぞ！」

それは、ぼくが以前にも口にした覚えのあるセリフだった。

地鎮祭のあと、まず道端に捨てられていた古看板を利用して、高さ一・四メートル、長さ三メートルほどのついたてを作り、国道の側溝にぴったりと接して立てた。その表側には、阿波田さんが筆を振るった「関係者以外立入禁止・永井史蹟学術調査団」の貼り紙を出す。通過するトラックの運転手が、スピードを落として興味深げに眺めていくから、これは安全面でも効果があった。中

には、車を停めて根ほり葉ほり目的を聞く人もいる。木内兼男きうちかねお氏もその一人だった。

木内氏は猿ヶ京と月夜野つきよのの間の湯宿ゆしゆくで土建会社を経営している。この一帯の土木工事の大部分は、木内建設が請け負っているらしい。だから、二日目の七月二十九日、現場を通りか



かった木内氏が、ジープを停めて、やっと深さ一メートルを超えたばかりの穴をのぞき込んだのも当然のことだ。

このとき、穴の周囲には、ぼくの仲間のほかに、応援団とも見学者ともつかない一団がいた。畠山氏の知人で、東京の美学校の講師をしている鈴木岬すずきこういち一氏が引き連れてきた、ムービーカメラマン志望の後藤英範君ごとうひでのりと三名の女子大生、それに、阿波田さんの友人で埼玉県熊谷市に住む横田嬢らである。女の子を含む、明らかに素人と思える連中が、国道のすぐ脇で工事をやっているのだから、木内氏は（何事か？）と、驚いてのぞき込んだのだ。

地下のトンネルの話は知らなかったが、目的を説明すると、

「それじゃ、おじさんが手伝ってやろう」

と、いきなり穴に入った。上州人特有の義侠心に富むタイプだった。短く刈り込んだ頭と日焼けした顔、将棋の角行を連想させるがっちりした体格は、いかにもこの業界の人という感じで、五十歳近いと思われたが、年齢を感じさせない力強さと見事なシヨベルさばきに、ぼくたちはあっけにとられた。

（さすがはプロだ）

ほんの十分か十五分の間に、軽く三十センチは深く

なっていたらさう。木内氏は、タオルで汗をぬぐうと、
「ま、がんばれや」

と、ひとこといい残し、飄然と去っていった。この木内氏が、後にぼくたちにとって救世主になろうとは、そのときは夢にも思わなかった。

この年は典型的なカラ梅雨だった。ろくに雨が降らないうちに、早々と梅雨明け宣言が出され、永井はもう十日も真夏日が続いているという。

七月三十日、発掘三日目を迎えた。午後二時を少し回ったころ、OL風の若い女性二人が、食堂「越路」の閉め切っ

たガラス戸を、遠慮がちにあけながら入ってきた。冷房のきいた室内が、彼女たちにとってもオアシスに思えたことだろう。冷えた清涼飲料を、のどを鳴らして一息に飲み干すと、タオルで汗をふきふき近くの椅子を引き寄せ、どっかと腰を下ろした。

そのときやつと、テーブル一つを隔てたところに、ぼくを含めた四人の男が、上半身裸でだらしなく椅子に体をあずけているのに気がついたようだ。

「あんたたち、どこから来たの？」

奥の小上がりから、畠山先生が声をかけた。

「え？ はい、三國峠から歩いてきました」

顔をおおったタオルから目だけ出して、一人が答えた。

「今朝早く上野を発って、沼田からバスで三国峠まで行つたんです。歩いて後閑あたりまで下ろうと思つていますが、ここまで来てもうくたびれちゃつて」

「ああ、東京の人たちかね。そりゃあ、この暑さの中、今日中に後閑まで歩くというのは厳しいぞ」

「ええ」

二人は、顔を見合せて諦めたようにうなずいた。

「どこか泊まるところ、ありますか？」

片方がたずねたので、ぼくが答えた。

「ここから村をぬけて下つていくと、法師温泉があるけ

ど、宿は一軒しかなくて、たぶん予約でいっぱいだろうから、やっぱり猿ヶ京だね」

「はあ」

法師も猿ヶ京も知らないようだ。

「猿ヶ京にしなさい。ホテルや旅館がいっぱいあるから、どこかあいてるよ。温泉と湖しかないけどね」

先生がそうすすめる。

「このへんはなんにもないんですね」

汗をやっとふき終えて一息ついたようすの、もう片方の女性がそう言った。どうやら三國峠だけを目標にやってきたらしい。

「ああ、いまのところはね。でも、あと二、三日すると、ここは世界的に有名になるよ」

ぼくの言葉に、二人は怪訝そうに顔を見合わせた。その様子を見て、先生が笑いながらつけ加えた。

「黄金郷なんだよ、この永井は」

二人は、まったく意味を理解できないでいる。

「エル・ドラドだよ。ま、いいさ、じきにわかるから」

ぼくはそう言いながら、二本目の牛乳をとるために、ドリリンクケースに近づいた。

（道路工事かなんかの労務者としか思えないこの男たち、何を血迷って黄金郷だのエル・ドラドなどと口走っている

るのかしら)

彼女たちの胸の内は手にとるようにわかった。やがて、小さなリュックをさも重たそうに背負うと、

「それじゃ、どうも。猿ヶ京に泊まることにしますから」といい残し、炎熱地獄の中に戻っていった。

「さて、われわれも夕方までもうひとがんばりするか」
ぼくは仲間を促して、汗と泥にまみれたタオルを頭に巻くと、意を決してガラス戸に手をかけた。

標高が八百メートルあるから、半分は避暑気分でやってきたのだが、その期待は見事に裏切られた。朝夕はさすがにしのがしやすいものの、陽が昇ると気温は急激に上

昇し、直射日光を受ける発掘地点は、午前十時ごろには四十度近くになってしまふ。おろかにも、初日に上半身裸で作業したため、背中が真っ赤に日焼けしてヒリヒリする始末。風呂でゆっくり疲れをいやすことができず、入浴のときは、ぬるま湯で汗と泥を流すだけだった。

体力を維持し、作業能率を落とさないようにするために、自然条件を十分考慮する必要がある。一つの策として、この日から、午前六時に発掘を始めることにした。八時に朝食をとったあと作業を再開。そして、正午から午後三時まで、二回目の休息を入れて、午後六時までめいっぱい掘るのだ。午後三時を過ぎると、発掘地点は蛇

腹山の陰に入ってぐんと涼しくなる。

すでにやぐらを組み、土はザルで引き揚げている。一輪車で四、五十メートルの距離を運んで空き地に積み上げた土が、もう五立米りゅうくべいはあるだろう。

深さ二・五メートルに達したところで、笛木大助氏が、国道の下に向かって横穴を掘って見たらどうかと助言した。昭和三十七年当時の記憶から、トンネルの位置は国道の下にちがいないというのだ。ぼくたちは躊躇しながらも、少しずつ横穴を掘り始めた。七十センチほどで、側溝の縁のあたりまで進んだが、なんの感触もない。

翌日も、早朝六時に作業開始。午前中に深さ四メートル

ル、国道側の横穴も一メートル十センチまで掘った。

その日の昼過ぎ、午睡中のぼくは、「越路」の若旦那にたたき起こされた。

「建設省の所長が来ていますよ」

あわてて店の前に出てみると、ヘルメットをかぶった年輩の男性が、厳しい顔をして待っていた。

「困るじゃないですか。道路の下に横穴を掘ったりしては。崩れたらたいへんなことになりますよ。午前中のパトロール隊からの報告を受けて、驚いてとんできたんですよ。即刻、調査を中止してもらおうしかありませんね」

所長は、強い口調でそう言った。このとき、畠山氏は

女子大生たちといっしょに、三国峠まで散歩に出かけていたから、ぼくが矢面に立つしかない。

「実は、地下のトンネルが国道の下にある可能性が出てきたものですから」

必死で弁解したが、所長は、

「そんなバカなことがあるはずがない。そんなものがあつたらとつくに埋めてるよ」

と、声を荒げて否定した。ちようどそこへ畠山氏が帰ってきて、同じようなやりとりがくり返された。

「わかりました。横へはもう掘りません。縦穴をあと一メートルほど下げたら、結論を出すことにします」

ほんとうに中止命令が出たら、これまでの努力が水の泡である。ぼくたちはそう約束するしかなかった。

「国道にはいつさい手を触れないという条件で許可したんですからね。約束を守ってくださいよ。いいですね。ついでに言つときますが、雨の用意が何もされていないじゃないですか。穴を覆うシート、それから、水が流れ込まないように土嚢を作つて。危険ですよ、雨が降つたら。危ないと思つたら、ダンプに砂利を積んですぐにとんできますからね」

素晴らしい残して、所長はジープに乗り込んだ。走り去るジープを見送つたあと、ぼくたちはがっくりと肩を落

とした。

道路下に横穴を掘るのがいかに危険なことか、それは十分わかつている。でも、笛木氏だけでなく、村の人の記憶は側溝の下あたりということと一致する。縦穴は三メートルも掘れば十分で、すでに達しているはずだと、口をそろえるのだ。

「しかたない。横に掘るのはやめて、あと一メートルだけ掘り下げることしよう」

畠山団長の号令で、所長に約束したとおりのことを実行に移す。皮肉にも、急に地層が変わってきた。砂利の混じらない赤土だけになり、俄然掘りやすくなった。ム

ダだと思いながらも掘り続け、夕刻までに目標の五メートルに達した。穴の周りに変化は起こらない。

こうなると、ぼくはトンネルの存在そのものを疑わざるを得なくなつた。

(誰かの作り話じゃないの?)

それを探すために費やした日々がむなしく感じられてきた。前年の分も入れると、すでに二十日近くにもなる。「もう見つかつてもいい」

これまではその言葉を何度も耳にし、また自ら口にしていた。それが(穴はないかもしれない)に変わってきた。しかし、諦めなくてよかった。野球でいえば九回裏の逆

転サヨナラ勝ち。謎のトンネルは実在したのだ。

国道十七号沿いの三国温泉郷の村々は、夏祭りのでわき返っていた。大型トラックの往来を遮断して、若衆のかつぐ御輿が気ままに揺れ動く。そんな夜が二日も三日も続くのだ。

八月一日の朝、ぼくは畠山氏とともに、湯宿の木内兼男氏を訪ねた。

（あの大将なら、いい知恵を貸してくれるかもしれない。相談してみよう）

それが、行き詰まったぼくたちの頭に浮かんだ、せめ

てもの打開策だった。祭り用の白い法被はっぴをまとった木内氏は、明らかに宿酔しゆくすいと見えたとの、快く相談にのってくれた。

彼は目的がわかっているので話は早い。削岩機のようなものを、国道の下に向かって突っ込んで、細い穴をあけてみたいというわれわれの案を受け入れ、すぐに、上越新幹線のトンネル工事のために月夜野に事務所を構えているC工業に連絡をとってくれた。その足で事務所へ行き、事情を説明すると、まだ三十代と思われる若い所長は、こちらが面食らうほど話にのってきた。

「おもしろそうだなあ。よし、ドリルを持って、若い者

「といっしょに行つてあげよう」

「あのう、費用のほうは。なにぶん予算がないもので」

ぼくは心配になつてたずねたが、所長はかぶりを振る。

「なあに、そんなものいらぬよ。ちよつとしたレクリエーションのつもりで行くから」

昼過ぎ、大型のコンプレッサーとドリルマシンが現場に到着。コンプレッサーは木内建設所有のものだ。

実にあつけなかつた。けたたましいドリルの音が響き始めて、ほんの十秒か十五秒後に、その先が赤土の壁を貫き、ズボツと吸い込まれたのである。

「あいたよ」

若い作業員が、穴の底から感動のかけらもない顔をぼくたちに向けた。彼にしてみれば、この先に空洞があるはずだから、ちよつとドリルであけてくれと頼まれ、そのとおりのことをして、そのとおりの結果が出たまでのことだ。しかし、ぼくたちにとってはとてつもない出来事であり、それがあまりにも簡単にいきすぎたものだから、一瞬、（うそだろう）と息をのむだけで、声も出なかった。

作業員は、一度ドリルを引き抜き、少し場所をずらし、再び突き立てた。直後に、周りの壁がドサドサッと崩れて、ぽっかりと黒い闇が現れた。

「やったーっ！」

もう疑う余地はない。我を忘れて狂喜の声を上げ、誰かれの区別なく、めっちゃくちゃに肩をたたき合った。畠山氏を振り返ると、無言で歯を食いしばっている。唇の端が震えているようにも見えた。無理もない。長い間心に引つかかっていたトンネルへの入り口が、

側溝の真下に横穴が見つかった瞬間



ようやく目の前に姿を現したのである。その感動は、ぼくたちとは比べものにならないはずだ。

作業員に上がってもらい、コゾノイとぼくが穴の底に降りる。崩れた壁の厚みは二十センチほど。まさにあとひと掘りだったのだ。想像以上に大きな穴で、ドリルが崩したところは地面から二・五メートルくらい下だったが、トンネルの天井はそこから五十センチほど上にあつた。つまり、国道の路面のわずか二メートル下に、このような空洞が激しい振動に耐えて、長い間存在していたのである。建設省の所長が知ったら、肝をつぶすにちがいない。

トンネルの底は、さらに一メートルほど下にあった。崩れ落ちたばかりの土の下には、天井から落ちたと思われる土がこんもりと積もっている。左手はすぐに行き止まりになっていた。昭和三十七年に埋め戻したあとだろう。

「やっそこいつの出番が回ってきたぞ」

白井正樹さんが、嬉しそうにヘルメットにキャップランプを取りつけ、点灯して少しだけ中に入ってみた。右手は急角度で下降していて、三メートルほどでほぼ直角に右に折れている。これも、村の人たちがいつていたとおりだ。

「さて、ここであいったん引き揚げだ」

興奮をおさえて、畠山氏が号令をかけた。閉鎖空間だったトンネル内にすぐ入るのは危険だ。酸素の状態や有毒ガスの有無を調べなければならぬ。とりあえず、コンプレッサーで外気を送り込み、まる一日待つことにした。C工業から酸素検知器も借りられることになっていたから、中に入るときにはそれを使って安全を確かめればよい。

残念なことに、ぼくはこの日の朝、会社に電話を入れて、休暇を一日引き延ばしたばかりだったから、東京に帰り、次の日はどうしても出社しなければならなかった。

後ろ髪を引かれる思いで、ひとり永井をあとにするころ、黒い雲が空を覆い、小雨が降り出した。農家からもらってきたビニールの大きな肥料袋で、土嚢を作つて穴の周囲を固め、上からブルーシートをかぶせたから心配はない。

畠山氏の提案で、トンネル内の安全が確かめられても、初めは大まかな検分だけにとどめ、本格的な調査は、仲元氏がやってくるはずの週末の八月五日から始めることになった。

八月四日の夕方、ぼくはコゾノイ、白井さん、鈴木君

の三人といっしょに上野を発った。財宝を求め、四たび永井への道をたどることになる。毎回少しずつ気持ちにちがいがあつたものだが、今度こそ、すばらしい大団円への花道になるような気がしていた。

信越線の後閑駅に着いたとき、ここへ来るのもこれが最後かと思うと、小さく淋しい駅舎に愛着心のようなものがわいてきた。バスを待つのももどかしく、後閑から永井へ直接タクシーをとばす。

民宿「越路」では、畠山氏と後藤君が、二人だけでぼくたちを待っていた。仲元氏は、娘さんの病状が落ち着いて、やっと八月二日に駆けつけることができたが、ト

ンネルに入って空気の状態が安全であることを確認すると、有力な場所を三カ所チェックして、山口へとんぼ返りしたとのことだった。五日にはまた顔を見せるといふ。（財宝が、暗闇のどこかで早く日の目を見せてくれと、ぼくたちを待っている——）

そのことを考えると、なかなか寝つかれなかった。

翌朝、食事をすませると、裏山の十二神社に参拝し、最後の祈願をした。

服装は地上での作業のときから一変した。Tシャツの上に長袖のスポーツシャツを着込み、ゴム長をはく。外はまだ真夏の空気だが、トンネルの中はひんやりとして、

寒ささえ感じるほどだと聞いていたからだ。

装備は、つるはしとシヨベルのほか、単一の乾電池を四個入れる強力なライトを三つ、小型の懐中電灯を三つ、そしてめいめいがキャップランプをつけたヘルメットを装着する。

未知の暗闇への入り口が、ぼくたちを誘うように待ちかまえていた。すぐ右手から始まる斜面を三メートルほど滑り降り、さらに右折する細い通路に足から入り込む。相変わらず、大型トラックが大地を揺るがせて通り過ぎていった。天井が崩れたら一卷の終わりだ。それにしても、よくこれまで崩れずにもったものである。建設省の

所長は、穴のあいた翌日に現場にやってきて、この現実を見せつけられ、びっくりすると同時に、態度をコロツと変えたそうだ。

「おそれ入りました。とにかくおめでとうございます。中は心ゆくまでお調べください。ただし、二週間後には、砂利で埋めさせてもらいますから」

国道の路面からおよそ五メートル下のレベルに、トンネルが水平に掘られていた。幅は約六十センチ、高さは、前から聞いていたとおり一・六メートルほどか。前かがみの姿勢で前進する。こういうとき、身長が一メートル八十センチあるぼくは不利だ。

地下水が十センチくらいの深さに溜まっていた。水面から硬いゴムホースが、まるで大蛇のような背をのぞかせ、それが延々と奥へ向かっていた。酸素検知器は異状を示さなかったので安心だが、落盤など不慮の事故に備えて、木内建設のコンプレッサーは借りたまま。いざというときには、このホースでトンネル内に外気を送り込めばいい。

真の闇というのは、日常生活の中にはなかなか存在しないものだが、ぼくはこのとき、それを体験した。ためにライトを全部オフにしてみると、まさに「一寸先も闇」だ。目をかっと見開き、首をぐるりと回しても、目



に入るものは何もない。

トンネルはわずかに蛇行し、三十メートルほどで「広間」に出た。村の人は四畳半ぐらいあったと話していたが、実際にはせいぜい二畳、一坪の広さだ。落盤によるものだろうか、天井がドーム型になっていて、床に土が一メートル以上もうずたかくなっている。

そこから左右に二本の通路が続いていて、右手のほうは、落ちた土のために腹ばいになってやっと入り込めるほど。左手は比較的ラクに進むことができて、距離を測ると、こちらは突き当たりまで二十五メートルあった。最奥部には、砂利がほぼ四十五度の角度でなだれ込んで

いるが、これが昭和十六年に埋められたあとだろう。左側の壁面に、墨で書いたような文字を見つけた。

〈昭和三十七年八月三十一日にはいる。永井 高橋良男〉

何とかそれが読みとれる。

広間から右手のほうは距離が短い。シヨベルで入り

T字形の横穴の交点部分はドーム状になっていた。



口を広げてもぐり込んでみると、奥行きは約十メートルだった。高さは一メートル七十センチと、ほかの部分よりも高い。ここで確かに行き止まりになっている。しつとりと水分を含んだ壁に、あたかもたったいま振るったばかりのような鍬のあとが残る。いったいいつごろ掘られたのか、ますます興味がわいてきた。ところどころ、胸の高さくらいに、鍬の先を打ち込んでつくったと思われる三角形のくぼみがあるが、これは明かりを置いた場所だろう。上の方がすすで黒くなっている。

白井さんは、トンネルに入る前から、最奥部に宝庫への入り口があるはずだと主張していた。ぼくたちは念入

りに周りの壁をつついたり削ったりしてみたが、どうやらその可能性はなさそうだ。

「足もとが怪しいんじゃない？」

ぼくが思ったとおり、最奥部の一メートル手前に、わずかに土が盛り上がったところがある。

「ここだ、ここだ！」

ぼくたちは小躍りした。すぐにでも掘り起こしたいところをぐっとこらえた。発掘は仲元氏の到着を待ってからだ。金属探知機の反応を調べてからのほうが確実だし、リーダーの一人である仲元氏をさしおいて掘り出すわけにはいかない。とりあえず、この本命地点へ、お年寄り

の二人が苦勞なく入ることができるよう、入り口を広げることにした。この作業に意外と手間取り、何とかかがんでくぐり抜けられるようになったのは、正午をかなり回ったころ。暗い穴の中になると、時間の感覚を失つてしまう。こんなときは腹時計がいちばん頼りになるよ
うだ。

　昼食後の休憩中に、仲元氏が勇んで駆けつけた。さあ、これからいよいよクライマックスを迎える。台湾で金塊をキャッチした探知機が、国内での埋蔵金発見第一号を演出するのだ。ぼくたちは期待に胸をふくらませた。ところろが、仲元氏の手になんかがない。(なぜだ?)

「危なくて、ここでは使えんのじゃよ」

聞けば、この器械は地中に二本の電極棒をさし込み、一千ボルトの電流を瞬間的に流して地下の電気抵抗を計測するしくみで、金属が埋まっていれば抵抗は小さく、何もなければ大きい。それがメーターの針の振れ方でわかるのだが、地面に水分が多いと、たとえゴム長をはいても感電してしまうおそれがあるというのだ。

事前に場所をチェックしていた仲元氏は、代わりに性能の点ではかなり劣るが、同じ原理の電気工事用のテスターみたいな検知器を使うことにしていた。

(それが役に立てばいいのだが)

ぼくたちが目をつけていた場所、とくに、最奥部の本命地点は念入りに検査してもらった。

「はつきりとはわからんなあ」

仲元氏が首をひねる。針の動きは微妙に変化するけれど、そこに金属、つまり金が埋蔵されているかどうかは判別がつきにくい。

(やはりあの探知機がないとダメなのか?)

それでも、ぼくたちは希望を捨てずに、三カ所の試掘をやることにした。楽しみをなるべく引き延ばすために、本命地点は二番目だ。

まず、入り口から広間へ向かう通路のほぼ中間地点を

掘ることにした。水がもつとも多く溜まっているところである。くぼみがあるということは、そこが過去に何らかの細工を施された場所とも考えられる。

しかし、通路が狭いために、排水が思うにまかせず、さほど深く掘り下げることができずに中止した。先のがった直径三センチほどの鉄棒でつついてみたが、壁の土と同じような小石混じりの赤土のようで、異状は発見できない。

次に、右手の奥の本命地点に移動した。ドキドキしながらシヨベルを入れてみた。ここは水分が少なく、水溜まりもない。

「石も混じっていないから掘りやすい。いよいよ怪しいぞ」

コゾノイの顔がほころんでいる。交代で一人ずつショベルを振るう。三十センチ、四十センチと、穴が深くなるにつれて、ぼくたちの動悸もしだいに激しくなっていくた。

「埋めるとしたら、一メートル以内だろう。それ以上深くする必要はないし、作業もおおごとだから」

仲元氏の言葉が、さらに意気を高揚させた。ライトの光源が右から左、そして右へとひんぱんに往復する。持ち手の手が汗ばんでいるのだ。

深さが五十センチほどになったとき、自らシヨベルを手にしていた仲元氏の動きが急に止まった。

「ダメじゃ、ここにはない」

見ると、シヨベルの先が硬い砂混じりの層にぶつかっていた。そこから下が自然のままの地層であることは、素人目にもはつきりしている。

「ここまでは土が軟らかだったんだから、誰かが一度掘ったあとだという可能性はありますよね。金を埋蔵する予定だったけど、途中で気が変わったとか、あるいは、すでに掘り出されたとか」

ぼくは大ざっぱに推理した。

「何ともいえんが、ないことは確かだ」

意外にも、仲元氏はさほど落胆したようすを見せない。引き続き、左手の通路の奥の水溜まりも少し掘ってみたが、ここも何ら手応えはなかった。

仕事の都合もあって、ぼく自身は、トンネル内の調査には正味三日しかつきあえなかった。そして、二週間後には、建設省の通告どおり、ダンプ三台分の砂利とコンクリートで、入り口はふさがれてしまった。

収獲ゼロ。ぼくはそう思った。納得できない畠山氏はその後、一坪ほどの広間にうずたかく積もる土のへりの部分から、カメのかけらと松明の燃えかすを掘り出した。

また、このトンネルがいつごろ誰の手で掘られたかも調べ上げた。

本陣の子孫の家に残っていた記録によると、掘ったのは、越後の松之山まつのやまから来た鶴松つるまつという男で、時は江戸時代後期の文化年間（一八〇四〜一八一七年）。松之山といえは、隠れキリシタンの里として有名なところだ。

さらに、永井の笛木恒氏ひしの家には、戒名の上に「ウハツキヨク」が書かれた過去帳がある。これは、「烏」と「八」と、「白」の下の横棒も切れている字を組み合わせた、文字とも記号ともつかないもので、曹洞宗（禅宗）の寺では卒塔婆の上などに書くが、意味はわかっていない。とこ

ろが、熊本県の天草に残る、天草・島原の乱の信徒三千人の首塚にも同じものがあることから、キリシタンの冥福を祈り、役人の目を欺くために作られたのだと言う人もいる。ここからは謎の部分もあるが、畠山氏はこう推理した。

「永井本陣をはじめ、ひよつとしたら二十六戸の先祖すべてが、江戸時代には隠れキリシタンだったのかもしれない。そして、トンネルは、隠れて礼拝を行うための場所として、あるいは、いざというときに逃走するための秘密の通路にするために掘ったのではないだろうか。いずれにしろ、財宝を隠すことを目的として掘った穴では

ないということだ」

以上の後日談をぼくが耳にしたのは、全員が永井から引き揚げてしばらくたってから、東京で畠山氏と再会したときだった。

「もし、あのトンネルのどこかに宝が隠されているとすれば、クリシタンの穴があることを知っていた者が、その穴を利用したことになるが」

畠山氏も、まだ諦めたようすではなかった。

「広間に積もった土の下は、調べることができませんでしたよね。あそこがいちばん心残りなんですけど」

ぼくが言うと、畠山氏もうなずいた。

「宝物でなくても、キリシタン関係のものが出てくる可能性はあるからね。もっと入りやすい場所にもう一度穴をあけて、調べられればいいんだけど」

そういつて遠くを見つめていた畠山氏の姿が、いまでもまぶたに浮かんでくる。それから二年間ほど、畠山氏は、ほかの二カ所の調査に専念したが、めぼしい成果はなく、体をこわして十年あまり入退院をくり返した末、一九九一（平成三）年の三月、八十五歳でこの世を去った。

なお、ぼくらはその後、仲元虎齋氏と組んで猿ヶ京のある場所を掘り、続いてそれ以前から仲元氏が執念を燃やしていた、結城晴朝の埋蔵金探しを手伝うことになる。